

2020年度業務実績報告書

提出日 2021年 1月 日

1. 職名・氏名 准教授 藤野秀則

2. 学位 学位 博士、専門分野 エネルギー科学、授与機関 京都大学、授与年 2008

3. 教育活動

(1)講義・演習・実験・実習	
① 当科目名（単位数） 主たる配当年次等 情報管理論（2単位 毎年開講） 3年生	
② 内容・ねらい（自由記述） 「情報の管理を通じた人と組織の管理」というコンセプトの理解を目的として、心理学や情報学、コミュニケーション科学といった学際的な視点から、情報と人や組織の行動・活動の関係を学ぶ。	
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫 今年度はオンライン講義ということで、オンデマンド形式の講義を取った。動画視聴は対面講義よりも集中力の維持が難しいと考え、1本あたり30分前後を目安に1つの講義動画を小分けファイルにしてアップロードするようにした。この点に関して学生からの評判は比較的良かった。それ以外については、もともとパワーポイントを用いたプレゼン形式の講義をしていたため、オンライン講義でもそれほど変わりなく講義ができた。	
① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等 経営情報論（2単位 毎年開講） 2年生（2019年度）	
② 内容・ねらい（自由記述） 組織における情報処理システムの技術的側面についての基礎知識の獲得を目的として、コンピュータやインターネットの動作原理の概要説明や、情報処理システムの設計の考え方、最近のIT系のホットトピックである人工知能、IoT、ビッグデータ、5G、さらにはSociety5.0やデジタル経済、デジタルトランスフォーメーションの説明を行なった。	
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述） 対面講義と併用であったが、対面講義を録画し、Goole Classroomにアップロードし、併せて毎回講義内容に即した課題を出した。課題については学生の負担を考え、選択問題を出題した。合わせてコメントや質問の収集を行い、寄せられた質問への回答を翌週の講義の中で行う形式をとった。質問内容はなかなか興味深く、当方にとっても勉強となる指摘も寄せられることもあった。	
① 当科目名（単位数） 主たる配当年次等 演習1（4単位 毎年開講） 3年生（2019年度）	
② 内容・ねらい（自由記述） 情報管理論や安全管理論の基本的な考え方を習得するとともに、研究を進めていく上での基礎スキルを身につける。また、理工系も含めた関連する他分野に対するリテラシーを築く。	
③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述） オンライン講義となった前期は遠隔ではあったが、従来と変わらず前期の間は、2人1グループに分けて、小研究を行ってもらい、後期からの本格的な研究にスムーズに入れるように努めた。ただ、従来のように研究室に自由に入出入りしてもらうなかで研究の進捗を確認したり、アドバイス・指導を行うということが、オンラインではできないため、うまく指導しきれなかった。対面講義となった後期では例年通りゼミコンでの発表を目標に指導した。前	

期がオンラインであったことの影響によりうまく研究を進めることができずに進捗は遅れ気味であったが、ゼミコンが近づくにつれ、例年以上に学生の進捗がよくなり、遅れを取り戻すことができた。ゼミコン後には、行った研究について卒業論文に準じたフォーマットで研究論文を執筆してもらい、それをもとに論文執筆指導も行った。なお、毎年、Word をうまく使いこなせず、その部分で卒論がはかどらない学生が出てくることから、LaTeX を使った卒論執筆について指導を行った。

① 当科目名 (単位数) 主たる配当年次等
演習 2 (4 単位 毎年開講) 4 年生

② 内容・ねらい (自由記述)

自分たち自身で PDCA を回すスキルを身に付けてもらうことを目的に、各自でテーマを立てて、自分たち自身で研究を組み立てていくという実践を行った。また、論文執筆を通じて論理的思考や論理的な文章とはどういうものかについての指導を行った。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫 (自由記述)

前期がオンライン講義となった点について、従来であれば就職活動で帰省していたり時間の都合がつかないなどで欠席になりがちであったが、オンラインであれば参加ができるということで演習活動を維持することができた。後期に入ってから対面講義が可能であったこともあり、従来通りに実験や調査を行うことができた。

① 当科目名 (単位数) 主たる配当年次等
外書講読 1 (2 単位 毎年開講) 2 年生 (2019 年度)

② 内容・ねらい (自由記述)

英語を英語として受け止められるように音読に力を入れるとともに、情報技術を中心とした時事問題に関連する知識を学びとることを狙いとした。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫 (自由記述)

去年度は専門書を使った講読を行ったが、学習効果として単なる英訳をした以上のことができなかつたと感じたので、再びネイティブスピーカーの読み上げがあるオンラインのニュースサイトから時事問題を中心に扱う形式とした。講義の実施形態は例年通りグループワークを行って互いの訳を持ち寄る形式とした。後半はオンラインになったが、案外オンラインでも対面と同様に実施できた。

① 担当科目名 (単位数) 主たる配当年次等
経営情報特論 (2 単位 偶数年開講) 大学院生

② 内容・ねらい (自由記述)

「情報管理を通じた組織管理」の考え方と、その応用として「情報技術を活用した情報環境整備」や最近の IT のトピックについて解説した。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫 (自由記述)

学部生上がりの学生が 1 人いたが、当方のゼミの学生であったため、ある程度フォローができると考え、他の 3 人の社会人をターゲットにおいた講義を行った。オンライン講義であったことは社会人の学生らにとっては自身の都合に併せた受講が可能であったので逆に都合が良かったようだ。進め方は従来と同様にパワーポイントを用いたプレゼン形式としたが、途中で 1 回だけ対面の時間を設け、その時点まで受講した内容について議論を行った。受講生からは好評であったため、当初の予定では最終回にもう一度対面の時間を設ける予定であったが、講義の進捗面から実施できなかったのは次回に向けた反省材料と考えている。

① 担当科目名 (単位数) 主たる配当年次等
専攻演習 2 (4 単位、後期～翌年前期) 大学院生

② 内容・ねらい（自由記述）

経営情報特論の講義のなかで触れた内容を基礎としながら、具体的な研究テーマを個人で立ててもらい、その研究を通じて修士論文執筆の骨格となる知見を導き出してもらおう。

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

社会人の学生であるため、学生の都合に併せて、隔週の土日に実施した。基本的に学生が実際に業務を行っている職場を具体的なフィールドとし、普段の業務（管理業務）を題材としながら職場の風土変革に関する研究を進めてもらった。具体的には、文献調査を行って課題をよりクリアにしてもらうとともに、部下への聞き取り調査を行ってもらった。研究がそのまま管理業務と結びついているため、積極的・主体的に研究を推進してもらっている。来年度の前期も引き続き子の進め方で進めていきたい。

① 担当科目名（単位数） 主たる配当年次等

専攻演習 3（2 単位、後期） 大学院生

② 内容・ねらい（自由記述）

修士論文執筆に向けた研究の詰めと修士論文の執筆の指導

③ 講義・演習・実験・実習運営上の工夫（自由記述）

学部上がりのゼミ生であったため、学部のゼミにも TA として参加してもらい、学部ゼミ生との顔つなぎをしていたため、学部ゼミ生が本学生の研究にスムーズに協力してもらうことができた。また分析についても極力自分自身で分析をしてもらい、R を用いた統計分析スキルの向上を意識してもらった。結果として、修士論文として一定の質のものを提出してもらうことができた。

(2)その他の教育活動

内容

例年、ゼミ生有志を連れて他大学との合同ゼミを行ってきたが、今年度に関してはコロナ禍の影響により実施できなかった。コロナ禍が落ちつけばまた再開したい。

4 年生 2 名の卒業研究の一環として、若狭町の民宿の活性化に向けた「民宿でのおもてなし」の在り方の模索をテーマとした PBL を行った。9 月以降 3 回にわたって若狭町を訪問し、民宿経営者への聞き取り調査を行った。

4. 研究業績

(1)研究業績の公表	
①著書	
	【0本】
②学術論文（査読あり）	
*1. 藤野 秀則, 岡本 健太, 奥成 太河, 玉澤 奈々穂: “大学生のグループワークにおけるグループの人数と参加者の性格 特性が意見発出への抵抗感に与える影響”, ヒューマンインタフェース学会論文誌 Vol.22, No.4, pp. 411-422, 2020	
*2. Hidenori Fujino, Taiga Okunari, Yuko Kato, Honoka Kobashi, Tomoya Tarutani, Nao Miyano, Soyoka Yagi: “Proposal to Enhance University Students’ Motivation to Switch to a Morning-Oriented Lifestyle with a Community Approach”, <i>Social Computing and Social Media. Participation, User Experience, Consumer Experience, and Applications of Social Computing</i> (Meiselwitz G. (eds)). HCII 2020. Lecture Notes in Computer Science. Vol. 12195 pp.511-525, 2020	
	【2本】
③その他論文（査読なし）	
*1. 藤野 秀則, 中川 凧沙, 中西 沙綺 :“服装と背景の組み合わせが人物の印象に与える影響の検討”,ヒューマンインタフェースサイバーコロキウム(HIC2 2020)論文集, pp.156-159, 2020.	
*2. 藤野 秀則, 奥成 太河, 加藤 優子, 小橋 穂乃佳, 樽谷 倫哉, 宮野 七緒, 八木 そよか :“大学生を対象とした SNS を活用した朝型生活促進方法の検討”,ヒューマンインタフェースサイバーコロキウム(HIC2 2020)論文集, pp.274-281, 2020.	
	【2本】
④学会発表等	
*1. 藤野 秀則, 中川 凧沙, 中西 沙綺 :“服装と背景の組み合わせが人物の印象に与える影響の検討”,ヒューマンインタフェースサイバーコロキウム 2020 (2020年10月) .	
*2. 藤野 秀則, 奥成 太河, 加藤 優子, 小橋 穂乃佳, 樽谷 倫哉, 宮野 七緒, 八木 そよか :“大学生を対象とした SNS を活用した朝型生活促進方法の検討”,ヒューマンインタフェースサイバーコロキウム 2020 (2020年10月)	
	【2件】
⑤その他の公表実績	
	【0本】
(2)科研費等の競争的資金獲得実績	
共同研究費 原子力安全システム研究所 54万円 研究代表者	

(3)特許等取得

(4)学会活動等

学会でのコメンテーター、司会活動（担当報告名、担当学会（大会）名（開催年月日））

- ・ 22nd International Conference on Human Computer Interaction セッション “Information / Communication Design for Social Issues I 及び II” 座長（2020年7月21日）
- ・ ヒューマンインタフェースサイバーコロキウム 2020 セッション 1B2「エージェント・ロボット 1」 座長（2020年10月16日）

学会での役職など（学会名）

- ・ ヒューマンインタフェースサイバーコロキウム 2020 実行委員
- ・ ヒューマンインタフェース学会 会誌編集委員会
- ・ ヒューマンインタフェース学会 研究会運営委員会幹事
- ・ ヒューマンインタフェース学会 論文誌編集委員会幹事
- ・ ヒューマンインタフェース学会安全管理支援技術専門研究委員会 幹事
- ・ 計測自動制御学会北陸支部運営委員

5. 地域・社会貢献活動

①国・地方公共団体等の委員会・審議会（それぞれの名称、業務内容、担当期間）
②国・地方公共団体等の調査受託等（それぞれの名称、業務内容、活動期間）
③（公益性の強い）NPO・NGO 法人への参加（それぞれの名称と活動内容、活動期間）
④（兼業規程で業務と見なされる範囲内での）企業等での活動（企業名、活動内容、活動期間）
⑤大学間あるいは大学と他の公共性の強い団体との共催事業等 （事業名称及び主催・共催者名、活動内容、活動期間）
⑥公開講座、オープンカレッジ、社会人・高校生向けの講座の開講（タイトル名、開催場所、開催日時）
<ul style="list-style-type: none">・ 福井県立病院での医療安全のための研修、福井県立病院、2020年1月31日、2月5日ともに18:30～19:30・ 県立大学公開講座「ヒューマンファクターと事故防止の考え方」2020年度後期10月、11月にわたり全4回（オンデマンド型講義として実施）・ 福井県薬剤師会での医療安全のための研修、福井商工会議所コンベンションホール、2020年12月4日19:45～20:45
⑦その他（名称、活動場所、活動期間）

6. 大学運営への参画

(1)補職
(2)委員会・チーム活動
職場委員会（R1.4～現在に至る） コロナ禍での前期講義のオンライン化に向けたWeb講義ワーキンググループ（R2.4～9）
(3)学内行事への参加
(4)その他、自発的活動など